



み や ぎ

文化芸術レポート



令和8年6月「東北の文化を支える河北新報社と（公財）河北文化事業団」

企業による芸術文化支援はメセナ（mécénat）と言われるが、古代ローマ帝政時代、皇帝に仕えていた高官マエケナス（Maecenas）が手厚く庇護したことから、「芸術文化を庇護・支援すること」を「メセナ」と呼ばれるようになったことに由来にする。

宮城県内でよく知られるメセナを実践している企業となれば、第一に思い浮かぶのは、県民の多くが親しんでいるメディア「河北新報」を発行している河北新報社である。同社は、公益財団法人河北文化事業団も立ち上げ、河北文化賞、河北美術展、河北書道展の開催を通じて、宮城県、広くは東北域内の文化振興の一翼を担ってきているが、創設の経緯や舞台裏を知る機会はなかなかない。

そこで今回は、上記の3つの事業の運営に携わってこられた、河北新報社事務局事業部長兼河北文化事業団事務局の菅原誠さんと河北新報社編集委員の古関良行さんのお二人に、同社のメセナ活動についてお話を伺った。

最も歴史が長いのは「河北美術展」で、1933年（昭和8年）に創設され、今年で第87回目を迎えた。なお、同展の前身となったのは、大崎市出身の画家渋谷栄太郎が、仙台を東北画壇の中心とすべく開始した「東北美術展」で、当時大きな注目を集めていたのだった。次に歴史の長い「河北文化賞」も1951年（昭和26年）に創設され、翌1952年（昭和27年）、同社の創刊記念日に当たる1月17日に第1回贈呈式が執り行われた。その後、1954年（昭和29年）に「河北書道展」が創設され、今年で73回目を迎える。

いずれも長きにわたり、東北地方の文化振興の礎を築いてきているが、最もよく知られているのは河北文化賞で、学術、芸術、体育、産業、社会活動の5分野で活躍されてきた受賞者の功績を称え、顕彰する賞となっている。朝日新聞社や西日本新聞社などでも独自の顕彰制度を有しているが、当該地域を代表するメディアから選考されることは、受賞者の方々にとって何よりの名誉となる。

しかし、そこに至る過程において事務局が果たす役割はなかなか知られていない。

事務局は、過去の受賞者を含む有識者、東北6県の地方自治体など約400件の個人・団体に推薦依頼を行い、そこから推薦されてきた候補者の方々から審査会を経て最終的に受賞者が決定されているが、候補者の方々から果たして要件に相応しいのかなど、審査会までにさまざまな資料や情報を調査して、用意しなければならない。無事、受賞者が決定されても、今度は贈呈式に向けて招待者リストの作成、贈呈式の進行や各種手配、会場の設えに至るまで細やかな采配が必要とされる。何よりも常に締め切りに追われ、かつ、受賞者発表までは慎重に作業を進めなければならない。従って、全ての作業は常に時間との闘いとなり、気が抜けないのが舞台裏なのだ。

さて、河北文化賞・河北美術展・河北書道展の中で最も歴史が長いのは河北美術展だが、新聞社が関わって公募展を開催するというのは、全国でも稀有な例でもある。

河北新報社が同展を立ち上げた経緯には、大変興味深い歴史がある。

同展は、東北大学で教鞭を執っていた、レオナルド・ダ・ビンチ研究の第一人者であった児島喜久雄、医学部の木下李太郎（本名：太田正雄）、河北新報社の一力次郎らが、東北に文化の灯をともし文化イベントを構想したことから始まったのだが、その際重視したのは「一流の審査員に審査してもらわなければ、質の高い作品も集まらない」という信念であった。

その信念に基づき、洋画部門で安井曾太郎、日本画部門で前田青屯らを審査員に依頼した経緯があった。いずれも当時第一級と言われていた画家である。



第75回河北文化賞贈呈式（令和8年1月）



み や ぎ

文化芸術レポート



令和8年6月「東北の文化を支える河北新報社と（公財）河北文化事業団」

さて、この理念に応えたのが、東京藝術大学で岡田三郎助に師事し、当時は東京在住だった杉村惇で、見事、第1回洋画部門河北賞を受賞したのだった。その後、杉村は仙台市に疎開した後、塩竈市に移住した。現在の塩竈市杉村惇美術館には、杉村の名前が冠され、第1回河北賞の受賞作品「婦人像」が展示されている。創設時に掲げられた第一級の画家たちが審査するという理念は現在も継承され、宮城県をはじめ東北在住の画家たちにとって目指すべき公募展としての存在を確立している。

東北の文化振興に関わってきている同展だが、やはり継続という課題がある。要因は、人口減、少子高齢化、世代交代など、他の社会課題にも共通しているが、加えて現在、美術と呼ばれる領域の境界が次第に曖昧になっているということがある。同展は、日本画、洋画、彫刻の3部門から構成されているが、その境界を越える作品（例えば、日本画の技法を用いて描かれた洋画など）も年々増え、審査が難しくなっているということだ。他方、若い世代が活躍しているという喜ばしい側面もあり、今年の洋画部門の河北賞の受賞者は現役の高校生である。

最後に、長年同社の文化事業に携わってきたお二人からコメントを頂いた。菅原さんは「休日返上の大変な仕事だが、受賞者の方々の笑顔を見ると、本当にやって良かったと感じる」と語り、古閑さんは「文化に関わる仕事は、長い眼で見ていかなければならないのだが、その中で生まれる人と人とのつながりが代えがたい財産となる」と笑顔を見せてくださった。

（文責：菅野幸子）



第87回河北美術展（令和8年5月）



第72回河北書道展（令和7年9月）

〔参考文献〕

- 古閑良行「美を紡いで：60回展を迎えた河北美術展<1>～<7>」『河北新報』、河北新報社、1986年。
- 西村勇晴「宮城県における戦後半世紀の文化活動史—洋画—」『宮城県芸術年鑑 平成2年度』宮城県生活福祉部文化振興室、1991年。
- 宮城県美術館・河北新報社「河北美術展50周年記念宮城県美術館開館5周年記念河北美術展半世紀の歩み」河北新報社、1986年。

〔写真提供〕

河北新報社

地域文化コーディネーターに関する情報はこちら！

<https://www.pref.miyagi.jp/site/geijyutuginga/art-management.html>